
町民C、勇者様に拉致される【番外編】

つくえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

町民C、勇者様に拉致される【番外編】

【Nコード】

N1979Y

【作者名】

つくえ

【あらすじ】

『町民C、勇者様に拉致される』<http://ncode.syosetu.com/n5611v/>の番外編です。本編を読んでいると分からない部分が多く含まれています。また、時間軸が大きく違うものもあります。本編とは違い、R15、更に残酷な表現、シリアス等いりまじった、カオスな場所になりますので苦手な方はご注意ください！ 残酷表現・R15相当の場合は、前書きに記載いたしますので目安になさってください。

断章1 白と赤 S V 6 9 2 3 年（前書き）

昔の勇者時代の話
あか
紅蓮の勇者時代です。

断章1 白と赤 S v 6 9 2 3 年

青年は寝台の傍らに立ち、嘆息に混せて言葉を零した。

「馬鹿だなあ」

静かな部屋にそれは聴くものがないまま拡散し、世界に混じる。寝台の上で、少女は安らかな表情で眠っていた。まるでやかだつた頬の稜線は薄くなり、僅かに女の色香を漂わせている。咲き初めの花の美しさを宿しかけていた年頃だった。ほっそりとした腕は、握りつぶせそうなほどに細い。遠慮がちに胸の上に組まれた指の下には、一冊の本が抱きしめられている。

もうこの眸が開くことはない。

よく笑う娘だった。あの自己中心的な男に邪険にされながらもよく付いていけると、傍目から見ても感心したものだ。真っ直ぐにあの男を慕っていたが、既に全ては星の彼方、世界の記憶の中にしかない光景である。あの男も、彼女もない。

青年は、もう冷たくなりかけている少女の額に掌を当てる。飛び去りし魂の気配は、すでに欠片も残っていない。

「君は本当に馬鹿だ」

少女の唇には、ほのかに笑みが浮かんでいる。

やわらかな日差しの中で午睡をしているように、彼女は永遠の眠りに就いた。

今日、この時に彼女の魂が途絶えると、星から読み取ったのは青年だった。残された時間を知りたがった彼女に、残酷な現実を告げたのも彼女だった。少女は真っ直ぐに彼を見上げて一言だけ告げた。嬉しい、まだそれだけ時間がある。

彼女は本当に嬉しそうにそう呟いたのだ。青年はそれ以上声を掛けることは出来なかった。ひとの命の儚さに触れるたびに、その強さにも驚くのだ。

少女は青年に、最後に一つだけお願いをした。

それは遺言かな？

青年の問いに、少女は答えた。遺言だったら、絶対に、お願いを聞いてくれますか？ 静かな凧いだ眸は、若々しい姿に似合わず静謐を湛え、彼を見上げた。

その眸には悲嘆もなく焦燥もなく、ただ全ての運命を受容した穏やかさだけが漂っている。静かな海のように少女は全てを深く深く懐に仕舞いこみ、その上で笑う。

仕方ない。最後に一つだけ、叶えてあげよう。

青年は一瞬その深い色に吸い込まれそうになりながら、苦笑しながら返事をした。

ありがとう！

少女は笑いながら何度も礼を言った。それだけが気がかりだった。と。もうその頃、彼女は床から離れる事はなく、命数を数える日々を過ごしていた。

まだ少女の声が耳に残響を残す。いつかはこの音も青年から消えてしまいかもしれない。星が巡る限り、世界は流動する。それも定めの一つだった。

「おやすみ、やすらかに、

」

青年は最後に彼女の名前を告げたが、それは既に記憶の彼方にしかない残照であり、世界から失われたものだったため、空気を揺らすこともなかった。手向ける花がない代わりに、これぐらいしか死出の旅立ちに渡すものはない。

青年は少女の手が触れている本を抜き取った。まだ硬直していないそのたおやかな腕は、ゆっくりと胸の上に納まる。

本に少女の魂が乗り移ったかのように、それはほんのりとぬくもりをもっていた。

最後の少女の願いは、この本のことだった。なるほど、その願いは確かに青年しか叶えられないものだ。彼は少女の最後の願いをかなえるために、踵を返した。窓から吹き込んだ風が、ふわりと白

いカーテンを揺らす。

風にまぎれ、おねがいします、とささやきのような少女の声が聞こえたような気がした。が、それは恐らく感傷が呼び起こしたものだろう。もう彼女がいないのを先ほど確かめたのだから。

青年は二度とこの場所に訪れる事はなかった。

青年が去ってしばらくのち、部屋に世話係の女性が現われた。

彼女は少女の様子に気づき、静かだった部屋に悲嘆の声が響き渡る。

残された人々は、少女が最後まで大切そうに書いていた日記がないことを不審に思い、探し回った。しかし、それはついぞ見つけることが叶わなかった。その書物の話は、それから時の彼方に消えていった。

50話記念アンケート第2位『町民Cと勇者様のほのぼの』

「勇者様は、海馬さんって見たことあるんですか？」

それはいつもの休憩時間だった。私はクッキーを頬張りつつ勇者様に問いかける。今日もクッキー美味しいです。あと四枚かあ。大事に食べよう。割れないようにちゃんとしまっておかなくちゃね！私の疑問に、近くで腰を下ろしながらも警戒していた勇者様は振り返って、

「ある」

と言った。

なんですと！ すごいっ！ 私は思わず身を乗り出すよ。

「どんななんですかつ、もふもふ？ それともわさわさ？ まさか、つるつるなんですか？ いろいろ想像しているんですが、イマイチ分からなくてっ！ どんななんですかつ！」

ずるずると座ったまま詰め寄ります。私の勢いに勇者様が逆に引き気味です。失礼な、噛み付きませんよっ。

「びちゃびちゃだと聞きました」

あっさり横からネタばらしするのは神官様だ。私は心にダメージを負いました！ なんですと。びちゃびちゃ！

……っ、つまりどんな？

「びちゃびちゃって、毛がですか？」

それはなんか……可愛くはない生物なのか？ ちょっとショックですね。てつきりもふもふかと。

「常に海際で生活する、半水棲動物ですよ。だいたい水の中か岩場に棲息しています。馬類に分けられていますが、本当のところはどうなんでしょうね」

珍しく適当な返事だ。いつもならびっくり詳細解説なのにな。

「神官様は動物にはあまり興味が無いのですか？」

多分なんでもとことん突き詰めるタイプだと思うよ！ 勝手になんでも深くご存知だと思っていました。

「そっち系統の資料は、あまり神殿にはないんです。興味をそそのころではあります」

「あー、もふもふはあまりあそこにいそうにないですね」

もふもふどころか人間以外の生物がいませんよね、あそこ。

星原樹を囲んでいた白いでかい壁が頭を過ぎる。といっても私が知っているのは神殿と王城だけ。せつかく星都にいったのに、おのぼりさん気分を堪能していませんよ！ 今度行ったら是非観光したい。

ともかく、神殿に動物がいないのは分かった。先に好奇心をみたすことを優先して、私は勇者様に詰め寄る。

「可愛かったですか？ どんなのなんですか？」

唯一の目撃者は離さないよ！ ふふふ。あの言い方だと、神官様は実際を知らないようだから、勇者様しか情報源がありません。

勇者様が私の迫力に目を逸らしました。なんですか、その見てはいけないものを見たような雰囲気は！ 顔が変わってないけどなんとなく察したよ！ ピンと来た！

私は地面にしゃがみこみ、ガリガリと陸馬さんを描く。もふもふ具合が我ながらよく描けました。誉めれるレベルです。

「これが陸馬さんだとすると、海馬さんはどんな感じなんですか？」
勇者様が少し考えた後、私の横にしゃがみこんで石を手に取った。
その手元をじーっとみる。

「足は四本で、首は一本だった」

地面に描かれた物を見て、私は沈黙した。これが、ゲー術ってやつですか。確かに爆発しそうです、私の頭が。四角に棒が刺さっている状態の何かが出現しました。ヘタとかいうレベルじゃない。伝

えたいことが一切伝わらない、恐るべきものが出現しました。
絵を挟んで沈黙する私と勇者様。

沈黙が、重い。

陸馬さんがもつしゃもつしゃと餌を食べながら私達をつぶらな瞳で見つめています。私は助けを求めるように陸馬さんを見詰めましたが、速攻で反らされました。ひどい。

これはいろいろつつこむべきなのか。それとも私が頼んだから曖昧に流すべきなのか。選択のときが迫ります！

私は意を決し、口を開きました。

「……足の数、陸馬さんと同じなんです……」

大きな流れには吞まれる。それが私の生き方です。逝き方じゃないよ！ 権力に迎合する一般庶民です。ちょっと難しい言葉を使ってみた。

「……すまない」

勇者様がボソツと謝罪の言葉を落とされました。いやああ！ やめてください！ 私が…私がツいたたまれなくなるううう！

「いえ……よく分かりました」

勇者様の画力が。

神官様は静観する方向にしたようです。でもここで口を出さないのは、神官様も絵が下手疑惑が浮上しますが、よろしいのでしょうか？ 私はじつと神官様を見詰めましたが、にっこり笑ってスルーされました。笑えばいいってもんじゃないよ！ たしかにドキツとするけど！ 勇者様の笑顔仮面具合には別の意味でドキツとするけど。いや、あれはビクツとするのか。

「いつか、」

勇者様が不意に口を開きました。私は神官様とのアイコンタクト

をやめて、絵を見ながら口を開く勇者様へ視線を戻しました。

「海際に行ったら、みることもあるだろう」

おお！ それはナイスアイデアですよ！ それでは、誰の学力も必要とせず、海馬さんが見ることが出来る。素晴らしいですねっ。
「そうですね！ その時は海の水なめてしよっぱいとかしたいです
！」

海かあ、本で読んだことしかないけど、どんなだろう。

想像する私の後ろで、陸馬さんがポーと鳴きました。休憩は終わりのようです。また私は荷物をまとめて陸馬さんによじ登ります。

しばらく陸馬さんに乗りながら海のことを考えて、またさっきの謎の絵を思い出したのは、私だけの秘密です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979y/>

町民C、勇者様に拉致される【番外編】

2011年11月10日04時36分発行